

## コンサルテーション事業報告

**事業名** 重複障害児・者コミュニケーション支援

**事業代表者** 川住 隆一 (人間発達臨床科学講座)

**対象** 重複障害児・者、重複障害児・者の家族、重複障害児・者が在籍する学校の教師、関係機関職員

**目的** 重複障害児・者と周囲の者とのコミュニケーションが成立・展開することを目標として、各々の生活の場や活動の場におけるコミュニケーションの機会と方法の開発を行うことを目的とする。また、このための周囲の在り方について、保護者や教員、福祉・療育機関職員とともに探っていく。

**主なスタッフ** 川住隆一および川住研究室在籍学生

東北大学大学院教育学研究科：野崎義和・南島 開・小野健太

東北大学教育学部：井澤仁志・関根杏子・寺嶋大輔・富田有紀・平野弘幸

### 実施内容

#### (1) 教育・養育相談として対応している事例 (7 事例)

7 事例は、重複障害を有している青年あるいは児童である。各々月に 1 度位の割合で保護者と共に来談しており、主にプレイルームで対応している。全員がコミュニケーションの発信・受信手段やコミュニケーション内容の拡がり为目标であるが、その他に、楽器や玩具の操作行動、絵画の表現行動、スイッチの操作行動の広がりも大きな課題である。

本年度は、この内の 2 事例について、富田 (2014) が、楽器を利用した相互交渉場面における対象児とかかわり手の行動について詳細なビデオ分析を行い卒業研究としてまとめている。また、南島、野崎、川住が楽器や VOCA を用いて行ったやりとりの結果と持続的な言語的働きかけの取り組み経過をまとめ、それらの意義について検討し、日本特殊教育学会の大会において発表している。(南島・川住・野崎, 2013 ; 川住・南島・野崎, 2013)。また、1 事例については、昨年度に引き続き訪問看護ステーションに所属する作業療法士と連携して、家庭におけるコミュニケーションの促進やコミュニケーションエイドの利用について取り組んだ。

## (2) 病院・施設に長期入院中の事例（1事例）

国立病院重症心身障害児・者病棟に入院していて、重度肢体不自由のため発信手段に大きな制約はあるものの言葉の理解力が比較的高い成人1名について、野崎が、週に1回の割合で会話によるコミュニケーション意欲の促進とパソコン操作による文字でのコミュニケーション支援を実施した。前者においては、野崎は音声言語と身振り動作を使用し、対象者は、表情・視線の変化、発声、手指・首・口・舌による身振り動作を使用している。会話の内容は、病棟生活での出来事、支援学校での活動（学齢超過就学生として小学部在籍）、体調、趣味（音楽鑑賞）などに関することであった。また、後者に関しては、手紙や年賀状の作成に取り組んだ。

## (3) 支援学校教師等との連携

代表者は、宮城県立支援学校小学部1～2年生の重複障害児学級担任の教師と連携し、在籍児童のコミュニケーション行動を拓げる糸口を探し出すとともにAAC・支援器機使用の方略について検討してきた。今年度は特に、特定の物や視覚的パターンには関心を示すが人への関心が乏しい児童や多動気味で物への関心が乏しい児童への対応について検討してきた（1～2か月に1度の割合）。また、宮城県および近県の教員や療育機関職員等とともに障害者のコミュニケーション支援と支援器機の開発を目的とした研究会「楽暮プロジェクト」の活動に取り組んできた（毎月1回）。

## (4) 研究発表等

川住隆一・南島 開・野崎義和（2013）重度・重複障害児のコミュニケーション行動に関する研究2—言語的働きかけに対する応答行動の発現経過—。日本特殊教育学会第51回大会発表論文集，P2-F-10.

南島 開・川住隆一・野崎義和（2013）重度・重複障害児のコミュニケーション行動に関する研究1—ツリーチャイムとVOCAを活用したターンテイキングの形成・促進。日本特殊教育学会第51回大会発表論文集，P2-F-9.

富田有紀（2014）重度・重複障害児との相互的活動に関する研究—楽器を用いた場面を通して—。平成25年度（2013年度）東北大学教育学部卒業論文.